

「習熟する国語」を見直せ

人間は、話すときに言語を用いるだけでなく、考えるときにも言語を使う。人間は言葉で考えるのである。

一九二〇年、インドで発見された少女、アマラとカマラは狼に育てられていたらしいが、「狼時代」の記憶は全く持っていなかった。彼らの記憶は、救出されて、言語を身につけ始めた時期と重なっていたという。

通常的环境中に育った人間の場合も、幼時の記憶が言葉を覚え始めた時期と重なることは誰しも体験しているところである。記憶ですら言語に媒介されているとすれば、言語がなければ人間性も存在できないことになろう。その意味で、言語は人間性の存在根拠だともいえるのである。

最近小中高校生の読書離れが深刻になっている。活字以外の媒体の隆盛、その他生活環境の変化が原因だと伝えられるが、これは彼らの人間形成そのものにかかわる深刻な問題である。

「書き言葉」は「話し言葉」の数百倍の豊かさを持っている。その豊かな言語を身につける最善の手段は読書である。映像文化だけで豊かな言語を身につけることはできない。テレビで用いられる語彙と、新聞で用いられる語彙とを比較すれば、その違いは明白である。

青少年の間で、その大切な「活字文化」が衰えてきている。これは単に、知識が乏しくなってきたというような問題ではなく、人間性そのものがやせ細ってきているものとして、深刻に受け止めなくてはならない。

超キライ、滅茶スキ、ムカツク、ウザッタイ等々、実際に、数十程度の「若者言葉」で日を過ごしている高校生集団も見受けられるが、これは言葉が貧困だというだけではなく、彼らの人間性そのものにかかわる深刻な問題なのである。

戦後わが国では、戦前とは比較できぬくらい読書の重要性が強調されてきた。昭和二十八年には「学校図書館法」が制定され、すべての学校に図書館を設置し、そこに図書館司書を置くことも義務づけられた（同法三条、五条）。

それなのに青少年の読書離れは皮肉にもかえって深刻化していった。これは、単なる環境の変化に起因するだけではなく、国語教育のあり方そのものにも問題があったのではないかと私は考えている。

既に述べたように、書き言葉は、話し言葉に数百倍する豊かさを持っているが、単なる読書だけでこれを定着させることはできない。音吐朗々と名文を朗唱し、やがてその全文をそらんずることができるようになって初めて、書き言葉は話し言葉のように肉体化されるのである。

戦前に化し、戦後の国語教育に致命的に欠けるものは、この音読の軽視だったのではない

だろうか。「考える国語」を重視するあまり、戦後教育は「習熟する国語」を軽視してしまった。

読書は面白さと難しさとの競争である。ある程度の「言語蓄積」なしに読書意欲を育てることはできない。この意味で、江戸時代の「論語の素読」のような手法に学ぶ所も少なくなっているのではないだろうか。

(平成 17 年 7 月 18 日 産経新聞掲載)